



CHRISTMAS
in Tokyo
2017

クリスマス・イン・トウキョウ

2017年12月22日(金) 19:00 開演

サントリーホール

Fri. 22 December 2017, 19:00 at Suntory Hall

主催：  JAPAN ARTS
ジャパン・アーツ

Program

クリスマス・イン・トウキョウ 2017 Christmas in Tokyo 2017

2017年12月22日(金) 19:00 開演 サントリーホール
19:00, Fri. 22 December 2017 at Suntory Hall

主催：ジャパン・アーツ

【第1部】オペラ・アリア名曲集

モーツァルト：歌劇『フィガロの結婚』序曲

W. A. Mozart: Overture from *Le Nozze di Figaro*, K.492

モーツァルト：“もう飛ぶまいぞこの蝶々”～歌劇『フィガロの結婚』K.492

W. A. Mozart: 'Non più andrai farfallone amoroso' from *Le Nozze di Figaro*, K.492
バス・バリトン/エドウィン・クロスリー＝マーサー Edwin Crossley-Mercer, Bass-Baritone
ソプラノ/マリーナ・モンツォ Marina Monzó, Soprano

モーツァルト：“手をとりあって”～歌劇『ドン・ジョヴァンニ』K.527

W. A. Mozart: 'Là ci darem la mano' from *Don Giovanni*, K.527
バス・バリトン/エドウィン・クロスリー＝マーサー Edwin Crossley-Mercer, Bass-Baritone
ソプラノ/マリーナ・モンツォ Marina Monzó, Soprano

ドニゼッティ：“人知れぬ涙”～歌劇『愛の妙薬』

G. Donizetti: 'Una furtiva lagrima' from *L'elisir d'amore*
テノール/デイミトリー・コルチャック Dmitry Korchak, Tenor

ロッシーニ：“噂はそよ風になつて”～歌劇『セビリアの理髪師』

G. Rossini: 'La calunnia è un venticello' from *Il Barbiere di Siviglia*
バス・バリトン/エドウィン・クロスリー＝マーサー Edwin Crossley-Mercer, Bass-Baritone

ヴェルディ：“女心の歌”～歌劇『リゴレット』

G. Verdi: 'La donna è mobile' from *Rigoletto*
テノール/デイミトリー・コルチャック Dmitry Korchak, Tenor

ヴェルディ：“慕わしい人の名は”～歌劇『リゴレット』

G. Verdi: 'Caro nome' from *Rigoletto*
ソプラノ/マリーナ・モンツォ Marina Monzó, Soprano

ヴェルディ：“乾杯の歌”～歌劇『椿姫』

G. Verdi: 'Libiamo ne' lieti calici' from *La Traviata*
ソプラノ/マリーナ・モンツォ Marina Monzó, Soprano
テノール/デイミトリー・コルチャック Dmitry Korchak, Tenor

ソプラノ/マリーナ・モンツォ

Marina Monzó, Soprano

テノール/デイミトリー・コルチャック

Dmitry Korchak, Tenor

バス・バリトン/エドウィン・クロスリー＝マーサー

Edwin Crossley-Mercer, Bass-Baritone

指揮/ミケレ・ガンバ

Michele Gamba, Conductor

管弦楽/東京交響楽団

Tokyo Symphony Orchestra

合唱/東京少年少女合唱隊

The Little Singers of Tokyo
Hisae Hasegawa, Principal Conductor / Artistic Director

常任指揮者・芸術監督/長谷川久恵

オルガン/大塚直哉

Naoya Otsuka, Organ

司会/坪井直樹

Naoki Tsuboi, Navigator

【第2部】クリスマスのメロディ

チャイコフスキー：バレエ組曲『くるみ割り人形』Op.71 から“小序曲”“ロシアの踊り”“あし笛の踊り”“花のワルツ”

P. I. Tchaikovsky: Miniature Overture, Russian Dance, Dance of the Reed Flutes, Waltz of the Flowers from *The Nutcracker Suite*, Op. 71
東京交響楽団 Tokyo Symphony Orchestra

モーツァルト：アヴェ・ヴェルム・コルプス K.618

W. A. Mozart: Ave verum corpus, K.618
東京少年少女合唱隊 The Little Singers of Tokyo 東京交響楽団 Tokyo Symphony Orchestra

グルーバー：きよしの夜

F. X. Gruber: Silent Night
テノール/デイミトリー・コルチャック Dmitry Korchak, Tenor
東京少年少女合唱隊 The Little Singers of Tokyo 東京交響楽団 Tokyo Symphony Orchestra

バーリン：ホワイト・クリスマス

I. Berlin: White Christmas
バス・バリトン/エドウィン・クロスリー＝マーサー Edwin Crossley-Mercer, Bass-Baritone
東京交響楽団 Tokyo Symphony Orchestra

クリスマス・キャロル：神の御子は今宵しも

Christmas Carol: Adeste fideles
ソプラノ/マリーナ・モンツォ Marina Monzó, Soprano
東京少年少女合唱隊 The Little Singers of Tokyo 東京交響楽団 Tokyo Symphony Orchestra

クリスマス・キャロル：神の子は生まれた

Christmas Carol: Il est né le divin enfant
バス・バリトン/エドウィン・クロスリー＝マーサー Edwin Crossley-Mercer, Bass-Baritone
東京少年少女合唱隊 The Little Singers of Tokyo オルガン/大塚直哉 Naoya Otsuka, Organ

クリスマス・キャロル：牧人ひつじを

Christmas Carol: The first Nowell
東京少年少女合唱隊 The Little Singers of Tokyo オルガン/大塚直哉 Naoya Otsuka, Organ

アダム：さやかに星はきらめき

A. Adam: O Holy Night
ソプラノ/マリーナ・モンツォ Marina Monzó, Soprano テノール/デイミトリー・コルチャック Dmitry Korchak, Tenor
東京交響楽団 Tokyo Symphony Orchestra

ヘンデル：オラトリオ『メサイア』から“ハレルヤ・コーラス”

G. F. Handel: "Hallelujah" from *Messiah*
全員 All

【第1部】

クリスマス・シーズンの今宵、コンサートの前半は人気のオペラから名曲をお楽しみいただく。まずは、18世紀オーストリアの作曲家であり、神童とも呼ばれたモーツァルトの作品から、『**フィガロの結婚**』(初演:1786)は、貴族に反発する市民層が勝利を収めるという、フランス革命勃発3年前の「時代の声」をコミカルに描いた傑作である。このオペラには名場面が目白押しであるが、歌われる曲だけでなく、開幕前に演奏されるこの**序曲**も非常に有名なもの。快活なテンポで勢いよく進み、物語のスピーディーな展開を象徴する1曲になっている。

次に、同じ『フィガロの結婚』第1幕から、主人公のフィガロが歌う“もう飛ぶまいぞこの蝶々”を。元は理髪師でありながら、今は伯爵の従僕であるフィガロが、主人の横暴な振る舞いにあてつけるべく、軍隊に行かされる小姓ケルビーノの尻を叩いて盛大に送り出すというひとこまを、勇ましいリズムのもと歌い綴った1曲である。主人公フィガロの機知と活力を露わにする名アリアだろう。バスの逞しい声音をお楽しみに。

続いては、モーツァルトが、伝説の放蕩の騎士を主人公にした名作オペラ『**ドン・ジョヴァンニ**』(初演:1787)から、第1幕の小二重唱“**手をとりにあって**”を。結婚式を挙げる村娘ツェルリーナに目を付けた騎士ドン・ジョヴァンニは、新郎のマゼットを追い払ってまで彼女を誘惑。このゆったりした調べを通じて、言葉巧みに、ツェルリーナの心に入り込んでゆく。ソプラノとバスの駆け引きに耳をそばだてていただく。

さて、ここからは19世紀のイタリア・オペラの名曲を堪能いただく。まずは、速筆の多作家であり、人情にも厚かったドニゼッティの名作から。喜劇のオペラ『**愛の妙薬**』(初演:1832)第2幕のロマンツァ“**人知れぬ涙**”である。このアリアでは、田舎の純朴青年ネモリーノが、愛するアディーナの素直な心に触れて、その感動をしっかりと歌い上げるさまが清々しい。テノールのロマンチックな歌いぶりをお楽しみに。

次に、モーツァルトを心の師と仰いだ「神童2号」、ロッシーニの喜劇のオペラ『**セビリアの理髪師**』(初演:1816)から、名アリア“**噂はそよ風にのって**”を。この物語は、実は、先ほどの『フィガロの結婚』の前日譚に当たるもの。青年貴族の伯爵と中産階級の娘ロジーナの恋を、当時は理髪師のフィガロが知恵を巡らせて成就させるというお話である。このアリアは、若者たちを邪魔する側の音楽教師バジリオが、「陰口を街中に振りまいてやろう」と囁くコミカルな1曲である。バスの深々とした響きを通じて、一筋縄では行かないバジリオの性格が徐々に浮かび上がるさまにご注目いただく。

続いては、19世紀後半のイタリアの「巨人」ヴェルディの名旋律を、『**リゴレット**』(初演:1851)は、道化師父娘が放蕩者の君主に弄ばれるという悲劇のオペラである。まずは、超人気のメロディ“**女心の歌**”。主君のマントヴァ公爵が、女性の心を欲しいままにする自分の「恋愛哲学」を誇らしげに

歌う人気のアリアである。テノールの艶っぽい高音域をお楽しみに。そして、アリア“**慕わしい人の名は**”を。道化師の娘ジルダがマントヴァ公爵と教会で出会い、彼が騙った「学生グワルティエーロ」の名を信じて、清らかな恋心を口にするという1曲である。ソプラノの初々しい歌声を存分に味わっていただきたい。

そして、第1部の締め括りに、同じくヴェルディの『**椿姫**』(初演:1853)から第1幕の“**乾杯の歌**”を。夜会の席で、高級娼婦のヴィオレッタと、彼女を純粋に愛する青年アルフレードが歌声を交わし合う名場面である。名歌手2人の贅沢な「声の宴」を楽しんでいただく。

【第2部】

本夕の第2部は、「クリスマスの歌」を中心にお届けしよう。まずは、オーケストラの名曲として、ロシアの作曲家チャイコフスキーの有名なバレエ音楽から。バレエ組曲『**くるみ割り人形**』(初演:1892)は、長大なバレエ全曲から、音楽としての聴きどころを抜き取った構成になっているが、本日はその中から、4つの名曲を続けてお聴きいただく。

まずは“**小序曲**”。弦の跳ねあがるような音型とフルートの細やかな音使いが、夜の楽しいパーティーを待ちかねる人々の浮き浮きした気持ちを鮮明に表している。次に、“**ロシアの踊り(トレバーク)**”。脚を高く上げて躍動感たっぷりな踊るロシアの民俗的なダンスが、華やかな打楽器の音色を交えて活き活きと表現されてゆく。続いては、“**あし笛の踊り**”。木管や金管楽器の様々な音色が、とほけた調子のメロディを通じて、優雅に表現される1曲である。

最後に“**花のワルツ**”を。大勢が出てきて一斉に踊る群舞の名場面であり、ハーブのそれは煌びやかなパッセージュを導入部として、クラリネットの温かみある音色と弦合奏のエlegantな個性が美しく絡み合う中、おとぎの国の宴が最高潮に達する。中でも華やかなフィナーレを、どうぞお聴き逃しなく。

続いては、趣向を変えて宗教曲の清らかな調べを味わっていただく。モーツァルトの『**アヴェ・ヴェルム・コルプス**』(作曲:1791)は、カトリック教徒が歌う聖体賛美歌のテキストに、この神童作曲家ならではの清冽なメロディがつけられたもの。「めでたし、乙女マリアから生まれたまいし、まことのお体よ」とラテン語で歌われる1曲である。本日は三部合唱とオーケストラの編成で、声の美しいハーモニーのもと、静けさ漂うひと時を堪能していただく。

次に、日本でも広く知られた名曲“**きよしこの夜**”を。もとはドイツ語の詩につけられた1曲であり、1818年のクリスマス当日に、オーストリアの教会で初披露されたというエピソードも良く知られている。作曲者は教会のオルガン奏者を務めていたF.X.グルーバー。彼が、「誰でも歌えるような易しい響きでクリスマスの歌を作りたい」と考えて作り上げた、不滅のメロディである。本日は、合唱団とオーケストラに加えて、テノールの独唱も交えて英語でお聴きいただく。

Program Notes

続いては、ポップスのクリスマス・ソングとして有名な、「**ホワイト・クリスマス**」を。ベラルーシから米国に移住して成長したI. パーリンが、恐らくは1940年に作曲したとされている。この曲は、アメリカの大歌手ビング・クロスビーが主演した映画『シング・ホテル』（公開：1942）の劇中歌として使われ、クロスビーの甘い歌声で一躍有名になったもの。本日は、オペラ歌手の甘く優しい低音の響きで、英語のメロディの心地よさに浸っていただく。

さて、ここからは、「クリスマス・キャロル（クリスマスに歌われる賛美歌）」の代表的な名曲を、4作お聴きいただきたい。初めに、「**神の御子は今宵しも**」。ラテン語の詩による1曲であるが、作曲者名や作曲時期には複数の説があり、13世紀にはメロディがすでに作られていたという説も存在する。しかし、18世紀半ばにイングランド人のJ.F. ウェイドが出版した曲集に掲載され、広く親しまれるようになったことは広く認められるところである。本日はソプラノのソロと合唱、オーケストラの演奏でお聴きいただく。

次に「**神の子は生まれた**」を。こちらはフランス語の詩に曲がつけられた伝統的なクリスマス之歌として、広く歌いつがれるもの。非常にシンプルな調べであるが、仏語の弾けるような響きが、耳にさらっと滑り込んでくる辺りをどうぞお楽しみに。本日は合唱にバス・バリトンのソロを交える形で、オルガンと共に演奏されるとのことである。

続いては、「**牧人ひつじを**」。こちらは英国のクリスマス・キャロルである。小宮郁子氏の詳論によれば、このキャロルは、1823年にロンドンで出版された楽譜に初めて載せられた1曲であり、メロディが作られたのは恐らくは18世紀頃とのことである。歌詞の内容は、天使が、羊飼いたちに喜び（つまり、イエスの誕生）を伝えるという情景を中心とするもの。わが国でも人口に膾炙したこの英語の名旋律を、本日は、コーラスとオルガンのみの編成でしっかりと味わっていただく。

ここで、フランスの作曲家によるクリスマスの名曲を、もうひとつお聴きいただきたい。バレエの名作『ジゼル』で広く知られ、オペラ史にも貢献度の高いアダマンが1847年に作曲した「**さやかに星はきらめき**」である。元の歌詞はフランス語であるが、のちに、かなり内容を変えた英語の訳詞が作られて、より広まることになった。本夕は、ソプラノとテノール、オーケストラという編成のもと、メロディの熱気が英訳詞で徐々に高まってゆくさまを存分にお楽しみいただきたい。

それでは、本日の掉尾を飾る名曲を。18世紀のドイツに生まれた大作曲家ヘンデルが、アイルランドのダブリンで発表した全3部のオラトリオ『**メサイア（救世主）**』（初演：1742）より、第2部の終曲にあたる有名な“**ハレルヤ・コーラス**”を。本日の出演者全員が登場し、荘厳な響きのもと、このコンサートを壮麗な歌いぶりで締め括るさまを体感していただく。